

## 大学体育授業に対する学生の意識に関する一考察 — 本学学生の調査から —

小泉昌幸\* 渋倉崇行\*\* 伊藤巨志\*\*\*

(平成12年10月31日 受理)

### A Study of the Students' Awareness of Physical Education Course

Masayuki KOIZUMI\* Takayuki SHIBUKURA\*\* Kiyoshi ITOH\*\*\*

The purpose of this study is to investigate the students' awareness of physical education course at the Niigata Institute of Technology. In order to carry out this study, a questionnaire was administered to 239 first-year students.

The main results were as follows:

1. Students recognize that the physical education course was necessary at the university.
2. It became clear that the physical education course had an effect on the students mentally as well as physically.
3. The contents of the physical education course were satisfying to students. As a result, students are taking the physical education course as an elective as well as a required course. Moreover, students have the desire to take the course as an elective if it is offered to second-year, third-year and fourth-year students.
4. The different kinds of classes offered now are mostly in line with what the students desire.
5. Some off-campus physical education classes desired by the students cannot be offered because of budget, lack of instructors, etc.

Key words: physical education class, necessity, students' awareness

#### 1. はじめに

現代社会は運動不足、ストレス等社会生活における非健康的要因が増大してきている<sup>1)</sup>。健康問題は高齢化社会を迎える我が国において社会的関心を集めている。このような状況において、自ら心身の健康を維持向上していく能力を身につけておくことは、学校教育においても重要な課題である<sup>2)</sup>。

スポーツは、体を動かすという人間の本源的な欲求にこたえとともに、爽快感、達成感、他者との連帯感等の精神的充足や楽しさ、喜びをもたらす、さらには、体力の向上や精神的ストレスの発散、生活習慣病の予防など、心身の両面にわたる健康の保持増進に資するもの

---

\*体育学 助教授 \*\*体育学 助手 \*\*\*県立新潟女子短期大学

である。特に高齢化の急激な進展や、生活が便利になること等による体を動かす機会の減少が予想される21世紀の社会において生涯にわたりスポーツに親しむことができる豊かな「スポーツライフ」を送ることは大きな意義があるといえる<sup>5)</sup>。

大学における体育・スポーツは、学生の健康・体力の維持増進、生涯にわたるスポーツ習慣を形成・定着させる視点に立ってスポーツの意義や価値を体感する経験を豊かに積ませることにある。また、運動文化の伝承、社会性の獲得などの教育的機能が認められていることも周知の事実である<sup>3,4,6)</sup>。そして高等教育の「大衆化」やスポーツに対する国民のニーズの高まり、生涯学習社会の進展、スポーツ科学・健康科学の発展等の社会変化に対応するうえからも21世紀において一層充実される必要度の高いものである<sup>6)</sup>。

このような社会的認識が、大学体育の存在理由となっている。

平成3年7月の大学設置基準の改正によって保健体育科目の開講は、これまでの設置基準で定められた必修科目から各大学の自主的な判断にゆだねられることになった。このような動向は、これまで大学教育における必修科目としての保健体育の重要性、必然性が十分に検討されてこなかったことの反映にほかならないといえる。

学生の心身の調和的発達を促進し、心身の不調に対応できる体力の養成をはかること、健康やスポーツに関する科学的理論に裏付けされた運動実践を行えるようにすること、さらにスポーツの文化的価値についての理解を図ることを通じてスポーツが学生にとって生涯にわたって心身共に豊かな生活を送るための糧となるよう学生の体系的認識力を育てることが大切である<sup>1)</sup>。

そして、それに対応する体育授業を展開するために、教師自らの教育理念・目的を明らかにし、より魅力ある大学の体育授業とはどのようなものかという視点で、大学体育・スポーツの取り組みについて多様な創意工夫を行うことが一層重要になっていくものと思われる。

本研究は、体育授業の必要性を規定する要因を分析するために「大学の授業として体育実技は必要と思いますか」という項目を従属変数として取り上げた。そして、満足感、価値、スポーツ欲求等との関連から、学生が体育実技へどのような意識・態度を有しているのかを明らかにすることを目的としている。

具体的には、体育授業がどのような価値を持ち、受け入れられているのかという視点から、学生が判断する体育授業への意識・態度を規定する要因を究明していくことである。そして学生のために質の高い体育授業を展開するために、有意義な示唆を与える基礎資料としたい。

## 2. 研究の方法

本学学生1年生249名を対象として、2000年9月に質問紙法による調査を行った。調査の方法は、授業時間を利用して、集団記入の形式で、調査者が説明をしながら実施した。記入漏れ、記入ミスがあったものを除き、有効回答数239、有効回収率95.9%であった。

### 3. 結果と考察

table 1 は、大学の授業として体育実技は必要かどうかについて示したものである。

体育実技の必要性を認めている学生は、68.2%、必要性を認めていない学生は、8.4%であった。学生にとって体育実技は必要性の高い授業であると認識されていることが理解できる。

Table 2 は、体育授業に関するとらえ方について

操作的に9項目であらわし、それぞれの項目に対して、「5非常に価値を認める」「4やや価値を認める」「3どちらともいえない」「2あまり価値を認めない」「1全く価値を認めない」とした5段階評定により回答を求め、その平均値を示したものである。平均値が4.00以上の高い値を示したものは、「体を動かす楽しさを知る」「運動不足の解消」「友人を得たり、交流の場」「気晴らし・ストレス解消」の4項目であった。この結果より、体育実技は学生にとって、楽しく体を動かすことにより、運動不足の解消という身体的側面ばかりでなく、精神的側面において機能することも価値判断の材料になっていることが明らかになった。また、体育授業における友人との交流の機会が重要なことも理解できる。

table1 The necessity of university physical education course

	%
necessary	68.2
Unnecessary	8.4
neither	23.4

table2 Value of university physical education course

	mean
Core subject	3.5858
Pleasure	4.3515
Make up for lack of exercise	4.3849
Friends	4.1423
Lifelong sport	3.3180
Skill	3.6067
Improvement in physical strength	3.8577
Stress release	4.2008
Credit	3.6653

table3 Value and necessity of physical education course

	Chi-square	Significance
Core subject	16.80150	*
Pleasure	26.06805	**
Make up for lack of exercise	17.01381	*
Friends	19.42477	*
Lifelong sport	17.08604	*
Skill	33.32023	***
Improvement in physical strength	18.46731	*
Stress release	17.18397	*
Credit	20.20693	**

\*p<0.05 \*\*p<0.01 \*\*\*p<0.001

Table 3 は体育実技の必要性について、その価値との関連について示したものである。9項目すべてにおいて関連が認められた。その中でも強く関連を規定する要因として、「体を動かす楽しさを知る」「スポーツ技術の向上」「卒業のための単位」があげられた。これは、学生にとって授業で

技術を習得することにより、ゲームにおいて体を動かすことの楽しさを実感できたからではないかと考える。「卒業のための単位」の項目については、体育実技が現在必修科目であ

るためと考えられる。

Table 4は体育実技の必要性と満足度について示したものである。また、Table 5は、必要性と現在開講している種目の満足感についてみたものである。どちらの項目も必要性と有意な関連があることが認められた。これは、学生が満足感を得られるような授業内容の構成を示唆している。今後も授業内容が学生にとって満足感を感じさせるものにするために、教師が各種目の目的、目標、特性を十分に理解し、基礎から応用まで、生徒の能力に応じて適切に指導できる技能を身につけていなければならないといえる。

Table 6と table 7は、授業に取り上げてほしい種目について3つまでの選択で回答を求めた結果である。選択肢は、学内で開講可能な10種目と学外で開講可能と考えられる13種目である。

table4 Necessity and degree of satisfaction of physical education course

	Satisfactory	Dissatisfied	neither
necessary	100	24	39
Unnecessary	4	5	11
neither	23	5	28

$$\chi^2 = 22.52831$$

$$p < 0.01$$

table5 Necessity and degree of satisfaction of physical education course (currently offered classes)

	Satisfactory	Dissatisfied	neither
necessary	163	62	30
Unnecessary	3	14	3
neither	13	23	20

$$\chi^2 = 18.01939$$

$$p < 0.01$$

table6 The students' desired classes (on-campus classes)

class		%
basketball	106	44.4
soccer	118	49.4
tennis	88	36.8
volleyball	63	26.4
handball	27	11.3
table tennis	69	28.9
softball	64	26.8
golf	47	19.7
badminton	106	44.4
trainingg	29	12.1

some students chose more than one class

現在学内で開講している種目は、ソフトボール、バスケットボール、サッカー、テニス、バレーボールであり、学生が希望している種目とほぼ合致しているといえる。また、バドミントンの開講を希望している学生が多い

table7 The sport to expect (off-campus classes)

class		%
skiing	92	38.5
snowboarding	107	44.8
windsurfing	14	5.9
surfing	34	14.2
camping	77	32.2
scuba diving	74	31
canoeing	30	12.6
swimming(pool)	44	18.4
swimming(sea)	44	18.4
sailing	14	5.9
mountain climbing	34	14.2
cycling	50	20.9
archery	103	43.1

some students chose more than one class

が、施設と受講者数の関係で現在は開講できない状況である。しかし今後は、学生の希望も大きいので開講を検討していかなければならないと考える。

学外実技について見ると、学生が希望している種目は多岐にわたっていることがわかる。

現在は、スキーのみ開講しているが、学生の希望する種目を取り上げようとするならば、施設、用具、予算、指導者等解決しなければならない問題が多い。学生の希望をすべて受け入れることは不可能に近いが、開講の可能性を探ってはいくべきであると考ええる。

Table 8 は生涯を通じて行いたいと思う種目について示したものである。選択肢は「授業に取り上げてほしい種目」と同じであり、方法は択一である。

table8 The sports perform students want to through out their lifes

class		%	class		%
basketball	36	15.1	skiing	59	24.7
soccer	43	18.0	snowboarding	40	16.7
tennis	33	13.8	windsurfing	1	0.4
volleyball	14	5.9	surfing	8	3.3
handball	2	0.8	camping	23	9.6
table tenn	20	8.4	scuba diving	17	7.1
softball	10	4.2	canoeing	2	0.8
golf	17	7.1	swimming(pool)	19	7.9
badminton	31	13.0	swimming(sea)	20	8.4
trainingg	33	13.8	sailing	0	0.0
			mountain climbing	8	3.3
			cycling	31	13.0
			archery	11	4.6

生涯を通じて行いたい種目は、授業で取り上げてほしい種目で上位にあげられた種目とほぼ一致している。ということは、現在開講している種目は、学生が生涯を通じて行きたいと考えている種目を授業として取り上げているということである。こういった点も授業内容に対して満足度が高く、体育実技が大学において必要のある授業と認識している要因になっていると考えられる。

教師は、学生が現在体育実技で自分の選択している運動の技能を一層向上させ、その運動の持っている特性により深く触れさせることによって、運動の継続的な実践を促すようにしなければならない。つまり、学生に対して体育授業時に各種目の目的を明確に提示し、理解を深めさせ、学生が興味・関心を持つ事のできるような授業の進め方をするようにしなければならない。

#### 4. まとめ

本研究は、体育授業の必要性を規定する要因をについて「大学の授業として体育実技は必要と思いますか」という項目を従属変数として取り上げ、満足感、価値、スポーツ欲求等との関連から、学生が体育実技へどのような意識・態度を有しているのかを明らかにすること

を目的として検討を進めてきた。

その結果、以下のようなことが提示された。

1. 体育実技は、大学において必要性の高い授業であると学生は認識している。
2. 体育実技は、体を動かすことの楽しさ、技術の獲得、運動不足の解消という身体的側面ばかりでなく、ストレスの解消という精神的側面においても学生にとって機能していることが明らかになった。
3. 体育実技はその授業内容が学生にとって満足感を得ることのできる授業であった。その結果として、学生は、体育実技が選択の授業であっても履修する。また2年時、3年時、4年時に開講されていたら履修するという意識を有している。
4. 現在開講している種目については、学生の希望とほぼ一致しており、また、これら種目は、生涯を通じて行いたいと思う種目でもある。このような授業内容を構成したことが、大学の体育授業に対して学生が満足感や必要性を認識した点であるといえる。学外実技に関しては、予算、指導者等の面から学生が希望する種目を開講できないものもある。しかし、最近の学生のスポーツに対するニーズの多様化を考えると、大学の体育授業においてもそのニーズに対応できるような体制を確立し、開講することができるようにしていかなければならないと考える。

以上のように学生が体育実技の授業を支持している状況をふまえ、本学における保健体育科目の質的向上をさらに図る必要があると考える。そのためには、体育授業を運営していくうえで、可能な限りソフト、ハードの両面をより一層充実し、本学独自のより望ましい保健体育科目を構築していきたい。

## References

- 1) 保健体育審議会. 生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興のあり方について. 保健体育審議会答申: 31-32. 1997
- 2) 岩崎義正. 「大学における保健体育のあり方」に関する調査報告. 大学体育: 30. 13(3). 33-41. 1987
- 3) 熊本水頼. 大学保健体育改革の提言. 全国大学体育連合総会報告資料. 1986
- 4) 前田充明. 大学体育のあり方について. 大学体育: 27. 12(3). 3-15. 1987
- 5) 文部省. スポーツ振興計画: 1-2. 2000
- 6) 奈良雅之・小原晃・加藤純一・本間玖美子. 大学教育における保健体育の成績評価の現状に関する研究—科目名の違いによる内容の分析を中心に—. 文部省科学研究費補助金(基盤C(2))研究成果報告書: 3-4. 2000
- 7) 戸田修三保健体育のあり方研究委員会報告書(修正案). (財)大学基準協会. 1989